

特集にあたって

福田正人*

精神疾患の症状として、当事者が体験する主観的な症状は重要な位置にあり、診断においては必要不可欠なものです。また、意欲や自発性の低下という主体性の困難はさまざまな精神疾患に共通して認められる非特異的な症状で、当事者の生活に大きな影響を与えます。さらに精神疾患の回復において、当事者が自らの主観的な価値に基づいて主体的に人生を生きていけることは、基本となります。

こうして、主観や主体は相互に結びついた精神医学における重要なテーマとして古くから重視されてきていますが、自然科学の対象とすることに困難があるため、これまで十分な発展を遂げられなかったところがありました。しかし、最近の臨床活動の広がりや脳科学の発展により、主観や主体を新しい視点から捉えることが可能となってきています。そこで、精神医学における主観と主体について、現時点での理解の到達点とこれからの方向性をさまざまな立場から解説していただき、現場での臨床実践に役立つとともに、主観や主体の科学を考える手がかりとなる特集を企画しました。

精神医学における主体性について精神病理学の視点から前田論文でご紹介いただき、それを踏まえた精神疾患の回復における主体性の意義について個人や社会の立場から中西論文・金原論文・熊倉論文で論じていただきました。そのような主体性や主観の脳メカニズムを、認知神経機構の脳画像について今泉論文で、統合失調症の眼球運動について小島論文でご紹介いただきました。基礎神経科学における今後の展望については、柳下論文で考察していただきました。これらの精神医学における主体や主観を相対化して捉える機会を与えてくれるのが、身体医学における新しい動きをご紹介いただいた冒頭の尾藤論文です。

ご寄稿いただいた論文からは、精神医学における主観や主体を新しい時代におけるテーマとしてあらためて問うことができる時期となっていることが実感されます。今後の精神医学と精神医療を担っていかれる読者の皆さんに、未来の方向性を示す特集となりますことを期待いたします。

* 群馬大学大学院医学系研究科神経精神医学 (〒371-8511 群馬県前橋市昭和町 3-39-22)